

国語

(六〇分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

— 次 次
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

僕は、だいたいにおいて、他人の目を気にしない人間だと思う。自分が基準なので、自分が普通だと思っただけで、結局、「何故、みんなはあんなに人の目を気にするのか」と考えるはめになる。ものごとを客観的に観察しようとする、人の目といった想像上の(思い込みの)自分の目こそ疑いたくなる。

もう少し説明すると、「人の目を気にする」人間の大半は、「自分の周囲の少数の人の目を気にしている」だけである。そして、「人の目を気にしない」というのは、自分一人だけの判断をしているのではなく、逆に、「もつと確かな目(あるときは、もつと大勢の目)」による評価を想定している、という意味だ。それは、「今の目」だけではなく、「未来の目」にも範囲が及ぶ。それが「客観」であり、「信念」になる。

②僕は今、作家という仕事に就いている。これは、そもそも人気商売といえる。そして、作家になる人、作家になりたい人というのは、人気を得ることを目的にしているのが普通みたいだ。大勢から注目されたい、という基本的な欲求がある。しかし、僕にはそういうものがない。なかったからこそ、四十歳近くになるまで、小説など書かなかった。たまたま書いてみたら、それが仕事になって、以来ずっとアルバイトとして文章を書いている。

自分が書く文章によって、自分を売り込みたいわけではない。人に好かれるために書いているのではない。伝わるものが伝われば、その結果として人にどう思われようとかまわないのだ。

現象的に捉えれば、僕が書いた文章を読んで得をする人たちがいて、その人たちから対価をもらい、僕は金銭的に潤う、というだけのことである。もし、その需要がなければ、いくら書いても本は売れないから、ヒツゼン的に仕事として成り立たない。

言論の自由、表現の自由、といわれているとおり、書くこと、発表することは個人の自由だし、芸術あるいは創作の自由は、常に個人の権利として確かにある。

けれども、その自由を謳歌したいから僕は書いているのではない。僕にとつては、書くことは自由を楽しむためのものではない。そうではなく、仕事で稼いだ金で自分のやりたいことができる、そのための交換手段なのだ。「金のために作品を書いている」というと、昔の感覚では「汚い」というイメージになるかもしれないけれど、こういうことは正直に述べる方が、「飾った偽り」よりは「綺麗」だと僕は考えている。この思想もまた自由である。

僕は大学院を修了して、すぐに大学に就職した。国立大学だったから国家公務員になった。一般の会社に勤めるよりは、かなり時間的にも、また労力としても束縛が少なく、つまり自由だったと思う。まず、上司からなにかを命令されることがほとんどない。ノルマというものも明確にはない。ときどき、会議に出席しなければならぬくらい、のセイヤクしかなかった。その当時はそんな感覚はなかったけれど、あとから考えてみたら、とても自由だったと思う。

③コウギをしたり、ゼミをしたりといった教育的なワークも、慣れてしまえば大した労力でもない。週に一回か二回程度のことだし、なにしろ毎年学生は入れ替わるので、内容はほとんど変わらない。蓄積ができれば、しだいに楽になる。

大学の運営については、ちょうど大学改革の時期だったから、それなりに大変ではあったものの、ただ時間をかければ良い、ということばかりで、それほど悩むようなものでもなかった。

しかし、大学人にとって最も大切なことは研究である。大学の教員は、教育者や官僚というよりは、研究者なのだ。助手の頃は、一日に十六時間は大学にいたと思う。土曜日も日曜日もいた。お盆も年末年始もない。ずつと仕事をしていた。

毎朝起きてすぐ考えることは、「今日は何をしようか」である。なにしろ、これといって与えられたノルマがない。とにかく、自分で仕事を見つけて、将来のテンポウを考え、計画を立て、自分で少しずつ進めるしかない。学生を指導するようになれば、彼らが考えるテーマも探してやらなければならない。「仕事をこなす」というよりは、「仕事を作る」役目の方が大きい。何を考えるべきか、何が問題なのか、どうすれば問題が顕在化するか、どんな手がまだ試されていないか、といったことを来る日も来る日も考える。進む方向は決まっていらない。やるべきことがあるわけではない。目標も、最初はどこにもない。それが研究である。自由といえば自由だ。

こういう自由な仕事というのは、たぶんほかにはそうそうないだろう。あるとしたら、芸術くらいではないか。芸術家は、こういう自由の中で生きているのかもしれない。現に、今、僕は小説家であり、まあ芸術家の一種といえなくもない。そして、たしかに、自由な点では研究とよく似ていると感じる。周囲から見ると、「自由な仕事」なんて、天国のようなリソウキョウに思えるかもしれない。しかし、まったくその反対である。

国語

そういった職場にいと、大きなプレッシャがかかるのだ。その証拠に、ときどき、教授から「ちよっと、これを手伝ってくれないか」などと仕事を頼まれると、もの凄く嬉しい。^④やらなければならないことがある、という状況が非常に清々しいのである。

給料をもらっているのだから、なにかしなければならぬ。なにも成果が上がらず、毎日遊んでいるばかりでは、だんだん後ろめたくなってくるだろう。それは、普通の神経の持ち主なら、たぶん長くは耐えられない。でも、とにかく考えて考えて、できないことがあれば、どうすればできるかを調べたり、試したりしながら、少しずつ前進する。しかも、その前進がまったく無駄だったとわかる可能性も大きい。それが研究というものだった。

人から与えられた仕事は、分量が決まっています、それが終われば、その仕事が消えてなくなる。また、時間的に決められている場合も多い。五時に仕事が終わって、晴れ晴れとした気持ちになる人たちは、そこで支配からの解放を味わうのである。

ところが、研究という仕事には、こういった支配がない。だから、終わりというものがない。毎日大学から家へ帰るときには、やりかけの仕事の合間にトイレへ行くのと同じ感覚だった。仕事が終わって嬉しい、という気持ちがようやく(部分的にだけ)理解できるのは、会議が終わったときくらいだった。

(中略)

こういった事例から感じるのは、「自由」というものに向き合うことの難しさである。たぶん、我々人間は自由あまり慣れていないのだろう。

僕がいたいのは、「自由」が、思っているほど「楽なものではない」ということである。自分で考え、自分の力で進まなければならない。その覚悟というか、決意のようなものが必要だ。

脅かすつもりはないけれど、客観的に見て、この要素を無視することができないので、マイナスの面を書いた(人によってはマイナスになる、という意味だ)。ただ、それは「山に登ることは大変だ。遭難の危険がある」というのと同様である。どんなものでも、なにかを乗り越えなければ、獲得はできない。

自由になるには、その覚悟が必要である。

少し違った方面から例を挙げる。

テレビでやっていたものだが、小学生がドミノ倒し大会に参加していた。体育館に大量のドミノを並べて、最後にそれが倒れるところを披露するのだ。部分的な失敗はあったけれど、まあまあ成功と呼べる結果があり、そして感動を味わう。みんな涙を流す。大きな苦勞があつて、それを友情や協力によって乗り越える、一言でいえばそんな演出だった。テレビを見ていた人も、きつと目を潤ませたことだろう。

僕はこういうものを見ると、たいていすぐに感情移入する方だから、つい泣いてしまうのだけれど、しかし、涙が出るからといって、^⑤それが無条件に素晴らしいものだとは思わない。本当の価値があるかどうかは、また別の問題である。泣けさえすれば良いというのなら、悲しい場面の同じフィルムを繰り返すだけで、人間は何度も泣けるだろう。

ドミノ大会は誰の企画だろう？ 小学生たちが言いだしたことだろうか？ 彼らは、自分たちの自由でドミノを並べたのだろうか？ そうではない。企画をしたのはテレビ局だ。つまりは、大人が用意した「簡単体験コース」に参加しただけである。

そもそも、「終わった！」「達成した！」という感覚こそが、人から与えられたノルマだから感じるものだと見える。

自分の発想でやり始め、自分が自分に課した目標であれば、たとえ見かけ上それを達成したとしても、新たな目標が必ず出てくるし、途中できつと不満な部分に出会い、あそこを直したい、もう一度ちゃんとやり直したい、という気持ちになるはずだ。自分の自由でやると、絶対にそうなる。経験がある人にはわかるだろう。

コンテストや競技、あるいは競争というイベントのときだけに「やった！」という達成感がある。とりもなおさず、それは自由を獲得したというよりは、不自由から解放されただけのことで、単に自由の出発点に立ったにすぎない。

目指すものは、自分で決めなければ意味がない。

本当の自由がそこから始まる。

目指すものへ向けて、少しずつ近づいていく自分、それを体感する楽しさ、そして、おそらくは辿り着けないかもしれないそのゴールを想うときの仄かな虚しさ、でも、とにかく、その前向きさが、自由の本当の価値だと僕は思う。

この価値を一度知ると、もう自由の虜になるだろう。変な言い回しだが、自由^⑥に縛られる。それくらい素晴らしいものだと思は考えているのである。

(森博嗣『自由をつくる 自在に生きる』より)

国語

- (注1) 客観 …… 個々人の考えや感情にとらわれずに、ありのままに物事を見ること。
○(注2) 需要 …… その商品を買いたいと求める気持ちや、求められている量。
○(注3) 謳歌 …… まわりの人と幸せを味わい、楽しむこと。
○(注4) ゼミ …… ゼミナール。学生が教員から指導されながら研究、発表、討論を行う。
○(注5) ワーク …… 仕事、作業のこと。
○(注6) ノルマ …… 最低限こなすように指示された仕事の量のこと。
○(注7) 顕在化 …… ものの存在がはっきりとあらわれてくること。
○(注8) 虜 …… 敵につかまった人。ここでは、あることに夢中になった人のこと。

問一 部1～5のカタカナで記した語を、それぞれ漢字で書きなさい(くずさず、ていねいに書くこと)。

問二 部①「人の目といった想像上の(思い込みの)自分の目こそ疑いたくなる」とありますが、ここで筆者が言おうとしているのはどのようなことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 未来にわたって他の人たちがどう見るかを想像していくためには、自分の基準を普通と考えるべきだということ。
イ 周囲にいる限られた人間の意見を気にかけっていると、自分が確かな判断を下していくのが困難になるということ。
ウ 未来にわたって数多くの人々がどう見ていくかを考えすぎると、本当の自分の意見がわからなくなるということ。
エ 自分の考えに近い人たちの意見ばかりを聞いていくと、確かな判断を下すことがかえって難しくなるということ。
オ 周囲の友人と意見が食い違ったからといって、それが判断を曲げなければならない理由にはならないということ。

問三 部②「僕は今、作家という仕事に就いている」とありますが、筆者は自分の今の仕事をどのようなとらえていますか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一部の人々の需要を満たしながら得た金銭を足がかりにして、社会的な名声を得るための手段。
イ やりたいことをするための時間と引き替えに、豊かな暮らしをするための収入を得ていく手段。
ウ 他人の評価や金銭面の問題を気にせずに、自分の好きなことを表現して喜びを得るための手段。
エ 自分がやりたいことを好きなようにするために、自分に共感する人々に思いを伝えていく手段。
オ 自分が思うことを文章にして、読んだ人から自分がやりたいことをする資金を得るための手段。

問四 部③「ずっと仕事をしていた」とありますが、筆者がここで述べている過去の自分の状況とはどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今後の蓄積ができるように、助手としての教育的な作業だけを必死にこなしている状況。
イ 大学が改革を求められていた時期で、時間を取られる仕事に見舞われ苦しんでいる状況。
ウ 自由な仕事を大学に許されたなかで、目標に近づく喜びを感じて夢中になっている状況。
エ 研究の上で何が課題なのか、今後何をどうするかをひたすら自分で考え続けている状況。
オ 仕事を終えた達成感を得ずに帰宅する自分が許せず、無理をして職場に残っている状況。

問五 部④「やらなければならないことがある、という状況が非常に清々しいのである」とありますが、それはなぜですか。その理由を百字以内で説明しなさい。

問六 部⑤「それが無条件に素晴らしいものだとは思わない。本当の価値があるかどうかは、また別の問題である」とありますが、「素晴らしいもの」とするためには、筆者は前提としてどのようなことが必要だと考えていますか。次の文の空欄にふさわしい内容の言葉を本文中から二十字以上二十五字以内で抜き出して、その初めと終わりの五文字を答えなさい。

「 二十字以上二十五字以内 」を達成すること。

問七 部⑥「自由に縛られる」とありますが、これはどのようなことですか。八十字以内で説明しなさい。

国語

二

大坂の料理店天満一兆庵の店主の嘉兵衛に育てられ、料理の手ほどきも受けた漣は、今は訳あって江戸で嘉兵衛の妻である芳(ご寮さん)と二人で質素な暮らしをしている。そんなとき、家の近くの稲荷神社(化け物稲荷)を手入れしていたことがきっかけで、漣は「つる家」というそば屋で働くことになった。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「このお稲荷さんが、漣とつる家とを結んでくらはったんやなあ」

長い祈りの時を終え、合わせていた手を解いて、(1) 芳が言った。

「ご寮さんとは名あばかりの私に代わって、漣を守ってくれはる。ほんにありがたいこと」

この江戸で佐兵衛の帰りを待つ、と決めたものの、嘉兵衛の残してくれたわずかな蓄えも底をつき、今は漣に養われる身であることが、ただただ心苦しい芳である。

① 漣はわざと明るい声で応える。

「ご寮さん、私、神田明神さんの前を通る度に思うんです。こんな大勢の参拝者の頼みごとを端から聞いてはったら、えらい長いことかかるやろなあ、て。なかなか順番が回ってけえへんやろなあ、て。罰あたりやけど、いつもそう思います」

芳が、ぷつと吹き出した。

漣は嬉しくなって、立ち上がると両手を広げて軽やかにくると回ってみせる。

「けど、ここはご寮さんと私だけですって、きつとお願ひごととも神様のお耳に届きやすいと思います。きつと」

漣の言葉に芳はうなずいて、もう一度、祠に手を合わせて頭を垂れた。漣も慌てて隣に屈むと、両手を合わせる。

勝手なことを申しました、と詫びながら、片目をそっと開けて神狐の足元を見る。途端、あ、と声を洩らしそうになった。確かに昨日供えたはずの油揚げが消えている。周囲に視線をめぐらせたが、どこにも見あたらなかった。

化け物稲荷で半刻(約一時間)ほど過ごして、芳はようやく、重い腰を上げた。立ち上がった途端、あつ、と短く言って膝から崩れ落ちる。ご寮さん、と漣が慌てて駆け寄ると、

「大丈夫、ただの立ちくらみやさかい」

と氣丈に言ったが、漣の手を借りても立ち上がることが出来なくなっていた。どないしょ、と漣が芳を抱き寄せたまま、

(2) 周囲を見回した、その時。

「どうかしましたか」

声の方へ首を捻じると、昨日の青年医師だった。漣が口を開かないうちに事情を察したらしく、(3) 駆け寄って芳を抱き上げた。そのまま楠の根元へ運ぶと、脈を取り、下まぶたを捲って色を確かめる。

「立ち上がるうしたら、こないなことに」

か細い声で訴える芳に、医師はうなずいてみせる。薬箱を探している素振りに、漣は弾かれたように立ち上がった。

「ありがとう。やあ、あなたの方がずっと具合が悪そうですよ」

真つ青な顔で薬箱を差し出す漣に、男は笑顔を向ける。体の震えが止まらない漣だった。

医師は薬箱から小さな丸薬を取りだすと、竹筒の水とともに芳に飲ませた。それから漣に向き直って、温かい声で告げた。

「心配せずとも大丈夫。血虚、という症状だけれど、命に係わるものではないですからね」

良かった、と思うと同時に涙が噴き出した。何とか堪えようと唇を引き結んだが、涙はぽろぽろと大きな眼から零れ落ちてその

胸元を濡らした。

「泣くのはあと。お母さんを家にお連れしましょう。悪いが薬箱をお願いします」

青年医師は地面に片膝をついて腰を落とすと、さ、おぶさってください、と芳に背中を向けた。

「母娘ではない？」

湯飲みを手にした医師が、驚いたように顔を上げた。

はい、と答えて、漣は布団の芳にそっと視線を移す。

「こちらはご寮さん——大坂では奉公先の女将さんのことをそう呼ぶのです。私は奉公人で、漣と申します」

「もうとうに大坂の店は焼け、江戸店も無くなってしまいました。それなのに、この子は私のことをまだご寮さん、と立ててくれます」

横になったまま、芳が掠れた声で補った。なるほど、とわかったような、わからないような顔でうなずくと、青年は居住まいを正

国 語

した。

「ご挨拶が遅れました。私は、神田旅籠町の医師で永田源斉と申す者です」

名乗った途端、ぎゅるる、と大きな音がした。何事か、と芳が半身を起こしかける。これは失敬、と源斉は慌てて腹を押さえた。

「いやはや、何もここまで大きな音で鳴かずとも良いものを」

恥ずかしそうに頭をかく姿に、濡は思わず吹き出した。ごめんなさい、と慌てて口を押さえて、転がるように土間へ降りた。

御ひつを覗くと、朝炊いたご飯の水分が飛んで良い塩梅になっている。流しには今朝、棒手振りから買った青菜。だが副菜を作っている時間はなさそうだ。

「では私はこれで」

「源斉先生、今、濡が何ぞ作りますので、どうぞ食べていつておくれやす」

帰ろうとする源斉を、芳が引き留める。濡は桶の中で手をきれいに濯ぎながら言った。

「冷やご飯のお握りですが、すぐ出来ますので、召し上がってください」

「いや、そんなわけには」

遠慮する源斉に、濡は笑顔を向ける。

「上方風の牡蠣の時雨煮も付きます」

昨夜、店で余った時雨煮を、例によって種市が持たせてくれたものだ。

上方風の、とつぶやいて源斉が喉を鳴らした。

「はい、牡蠣の時雨煮でございます」

つる家で不評だったことは伏せて、濡はにっこりと笑ってみせた。

手を濡らし、焼き塩を付けて冷や飯を小ぶりの俵の形に握り、平皿に並べていく。

先を濡らした箸に、炒った黒胡麻を付け、俵の上にちよんちよんと置いて仕上げた。牡蠣の時雨煮を小鉢に装い、角盆に載せて、源斉のもとへ運ぶ。

「変わった形の握り飯ですね」

どれ、と源斉はひとつつまんで（ 4 ）口に入れた。うん、と大きくうなずくと素早く小鉢に箸を伸ばす。よほど空腹

だったのか、皿と小鉢が空になるまで口も利かないままだった。

旺盛な食欲は、それだけで傍にいるものを幸福にする。芳と濡はそつと互いを見合った。

「いやあ、旨かった。本当に旨かったです。久々に寿命が延びた心地がしました」

言いながら、空の皿を未練そうに眺める源斉に、二人が笑いを囁み殺した。

「上方の牡蠣の時雨煮は、色白で味が控えめなのですね」

源斉の言葉に、濡は、あつ、と思う。料理は色めがとても大切なのだ。大坂の醤油は薄色で素材の色を殺さない。江戸は逆で、

醤油の濃い色に染まった方を「旨い色め」と感じるのではないか。色が付くのを恐れて、醤油をつい控えてしまうが、つる家の暗

い灯りの下、色めの薄い時雨煮は客の目に少しも旨そうに映らなかったのではないだろうか。

「江戸は塩辛い料理が多おますなあ。こちらに來たばかりのころは、喉が渴いて渴いて、敵いませんでした」

芳が控え目に言うと、源斉は、ああ、それは、とわずかに身を乗り出した。

「私が思うに、江戸は職人が多い。たとえば大工などは体を酷使するから、年中、汗を大量にかくのです。汗をかくと、体から塩けが抜けてしまう。だから自然と塩けの強い、味の濃いものを好むようになるのですよ」

「ああ、なるほど」

④ ぼん、と濡が両手を打ち合わせた。つる家に集う客たちが濃い味付けを好むのは、そうした理由からだったのか。その道理も

知らないまま、ひたすら、上方の味の方が良い、いつかはその良さをわかってもらえる、と思い込んでいた濡である。源斉の指摘

に、まさに 1 思いであった。

医師を送って表通りに出ると、濡は（ 5 ）薬礼のことを尋ねて、出来れば少し待ってもらいたい、と身を縮めて頭を下

げた。

「薬礼ならもう頂きました」

握り飯のことを言っているのだと悟った濡は、慌てて首を振った。

「源斉先生、それはいけません」

国語

「良いですよ。それより、今後何かあれば遠慮なく訪ねていらつしやい」

源齊は朗らかに言うのと、軽い足取りで行ってしまった。漣は、その後ろ姿に深く一礼する。ひとの情が骨身に沁みて、源齊の姿が通りの向こうに消えてしまっても、顔を上げることが出来なかった。通りがかりの子供がうつむいて泣いている漣のことを不思議そうに見上げていた。

(高田郁『八朔の雪 みおつくし料理帖』より 一部改変)

- (注1) 嘉兵衛 …… 芳の夫。江戸の地で亡くなってしまった。
- (注2) 佐兵衛 …… 芳の息子。天満一兆庵江戸店を開店したが、今は店を閉じてしまい、行方もわからない。
- (注3) 血虚 …… 血のめぐりが悪くなり身体に不調をきたしている状態。
- (注4) 塩梅 …… ものことの程合い。
- (注5) 棒手振り …… 棒に商品をぶら下げて売り歩く人。
- (注6) 種市 …… つる屋の店主。
- (注7) 薬礼 …… 薬の謝礼。

問一 本文中の() 1～5に当てはまる最もふさわしい言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上用いてはいけません。

ア おずおずと イ おろおろと ウ さつと エ しみじみと オ ひよいと

問二 本文中の 1 に当てはまる「急に物事の本質がわかるようになる」という意味を持つ、身体の一部を使った慣用句を答えなさい。

問三 ——— 部①「漣はわざと明るい声で応える」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 住み慣れた大坂を離れ気苦勞のある生活をしている芳を元気づけるため。

イ 江戸での生活にも慣れて楽しく生活を送っていることを芳に伝えるため。

ウ 江戸暮らしでのつらい状況に気がつかない芳への怒りをおさえるため。

エ 遠い江戸の地に来たことへの深い後悔を芳に悟られないようにするため。

オ 互いに気を遣いすぎたことで沈んでしまった場の空気を盛り上げるため。

問四 ——— 部②「涙はぼろぼろと大きな眼から零れ落ちてその胸元を濡らした」とありますが、ここにおける「漣」の気持ちの説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 体調の優れない芳と一緒に見知らずの土地で過ごすことを考え、不安でいっぱいになった。

イ 目の前で芳が倒れるのを見て、近いうちに芳を失ってしまうのではないかと恐ろしくなった。

ウ 芳の一大事に何もできなかったことで、自分の無力さを痛感し悔しさを隠しきれなかった。

エ さっきまで元気だった芳が急に倒れたことで、どうして良いかわからず動揺してしまった。

オ 芳が突然倒れ一時はどうなることかと思ったが、たいしたことはないとわかって安心した。

問五 ——— 部③「笑いを噛み殺した」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 用意したおにぎりをすべて食べておきながら、空の皿を物欲しそうにしている源齊の欲深さにあきれている。

イ あり合わせの材料で急いで作ったおにぎりをとてもおいしそうに食べてくれた源齊の様子を見て喜んでいる。

ウ 時雨煮だけでなく、残り少ない食物から作ったおにぎりを無遠慮に食べた源齊のことを苦々しく思っている。

エ 病気をみてくれた医者源齊がおにぎりくらいで大げさに振る舞うことのおかしさを必死にがまんしている。

オ 漣が予想していた以上におにぎりにほどこした少しの工夫で源齊が喜んでくれたことをほくそ笑んでいる。

問六 ——— 部④「ぼん、と漣が両手を打ち合わせた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。七十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問七 ——— 部⑤「うつむいて泣いている漣」とありますが、ここにおける「漣」の気持ちを「漣」の置かれている状況をふまえて八十字以内でわかりやすく説明しなさい。

国 語

問八 「滯」は本文全体を通してどのように描かれていますか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の出身地である上方の言葉づかいや文化に強いこだわりを持つ頑固な少女として描かれている。
- イ その場の機転と自由な発想で、様々な困難を乗り越えてゆく元気あふれる少女として描かれている。
- ウ つらい境遇でも相手への気づかいや、もてなしの心を忘れない心温かい少女として描かれている。
- エ 誰の助けも借りずに、一人で生きていくという強い意志を感じさせる少女として描かれている。
- オ 周囲の人たちを自然と引きつけるほどの、美しい容姿を持った魅力的な少女として描かれている。

国語訂正

(六枚目) 問五

誤

ア 用意したおにぎりをすべて食べておきながら、空の皿を物欲しそうにしている源齊の欲深さにあきれている。



正

ア 用意したおにぎりをすべて食べておきながら、空の皿を物欲しそうに見ている源齊の欲深さにあきれている。

※じるしのらんには何も書かないこと。

1801

1141

(を達成すること。)



Subject Index

111

問八